

## 東京都墨田区における乳児アレルギー検診の 実態

向山 徳子, 山口 公一, 馬場 実

**要約：** アレルギー性疾患の発症予防のために、乳幼児期におけるアレルギーリスク児に対する早期発見、および早期対応の重要性が指摘されている。我々は平成元年度本研究の報告書において、東京都墨田区における3・4カ月乳児健康診査におけるアレルギー検診につき報告したが、今回その後の経過について検討した。問診票、IgE、RAST（ダニ、HD、卵白、牛乳、大豆）などの血液検査を実施し、その結果に基づき個々の症例につき、保健指導や栄養指導を行い、1歳6カ月および3歳まで経過を追った。

**見出し語：** 乳児健康診査、アレルギー検診、IgE、RAST

**【目的】** 近年、アトピー性皮膚炎や気管支喘息などのアレルギー性疾患の発症予防のために、乳幼児期におけるアレルギーリスク児に対する早期発見および早期対応の重要性が指摘されている。我々は3年前より東京都墨田区において、3・4カ月乳児健康診査におけるアレルギー検診を行っている。今回その実態および経過につき検討し報告する。

**【対象ならびに方法】** 3・4カ月健診で二親等内の親族にアトピー性皮膚炎や気管支喘息、アレルギー性鼻炎などのアレルギー疾患を保有し、本人に湿疹、喘息、下痢、嘔吐などの症状を有する児を対象として、栄養法や家庭環境などにつき詳細

に問診を行い、必要に応じ血清IgE、RAST（ダニ、HD、卵白、牛乳、大豆）などの血液検査を実施した。問診票、血液検査の結果に基づき個々の症例につき、さらに保健指導や栄養指導を行い、1歳6カ月および3歳まで経過を追った。

昭和63年度から東京都墨田区本所保健所、向島保健所地区にて出生した児を対象に検診を行った。

3・4カ月乳児健診の全対象児数は昭和63年度2003名、平成元年度1795名、平成2年度1713名で、そのうちアレルギー検診の対象となったものは各々86名、76名、98名であった。

**【結果】**(1)アレルギー検診対象児の症状については、湿疹が76.7%と最も多く、次いで喘息21.7

---

同愛記念病院小児科 (Doai Fraternity Memorial Hospital; Department of Pediatrics)

%, 下痢 0.8%, 嘔吐 0.8%であった。

(2)家族におけるアトピー性疾患の保有状況については、母親に保有していたもの 31.0%, 父親 18.4%, 両親 16.1%, 同胞 14.9%であり親ならびに同胞に保有していたものに 19.5%であった。

(3)アレルギー検診を受診した児の栄養法について図 1 に示す。母乳栄養 56.3%, 人工栄養 24.1%, 混合栄養 19.5%であった。また検診前から既に除去食が開始されていた症例も多く、全体の 7 割以上で何等かの除去食が実施されていた。なかでも鶏卵はほとんどの症例でその対象となっていた。

しかし除去の程度はさまざまで、控える程度といった不完全な場合が多く、厳密な除去を行っていると考えられた症例は全体の 1 割弱であった。

(4)栄養法と血清 IgE 値については、母乳栄養、人工栄養、混合栄養の 3 群間で特に有意差を認めなかった。

(5)ダニ、HD、卵白、牛乳、大豆の 5 抗原に対する RAST の陽性率について図 2 に示した。それぞれ左側から母乳、人工乳、混合の栄養法別に検討したが、卵白抗原に対する陽性率は 3 栄養法とも高く、また牛乳抗原に対する陽性率は母乳栄養群で高い傾向がみられた。

(6)除去食の影響について、鶏卵の除去の有無と、卵白抗原に対する RAST の陽性率を検討した。母乳、人工栄養群において、除去を行っていた群で、卵白抗原に対する RAST 陽性率がやや低下していた。

(7)これらの症例について、問診票や血泌検査に基づき、保健指導や環境整備、また症例によっては除去食を含めた栄養指導を行ない、必要に応じて専門の医療機関を紹介した。

このような指導を受けた今回のアレルギー検診対象児のその後の経過につき表 1 に示した。1 歳 6 カ月検診時と 3 歳検診時において、気管支喘息あるいはアトピー性皮膚炎と診断されたものの割合について示した。1 歳 6 カ月検診時での対象児数は 164 名で、そのうち 9 名 (5.5%) が気管支喘息と診断され、28 名 (18%) がアトピー性皮膚炎と診断された。3 歳時ではまだ例数が少なく、十分な検討は行なえないが、57 名中 4 名が新たに喘息と、また 2 名が新たにアトピー性皮膚炎と診断されていた。

【考察】二親等内の家族にアレルギー疾患を保有する、いわゆるアレルギーリスク児においては、生後 6 カ月前後で既に特異 IgE 抗体の陽性率は高く、特に卵白の陽性率は約 60% と最も高値を示した。また牛乳、大豆、ダニ、ハウスダストにも陽性を示す症例がみられた。このようなアレルギーリスク児に早期から、環境指導や栄養指導を行うことは、将来のアレルギー疾患発症の予防に有用であると思われる。

今後はさらに経過を追って指導、観察を続ける予定である。

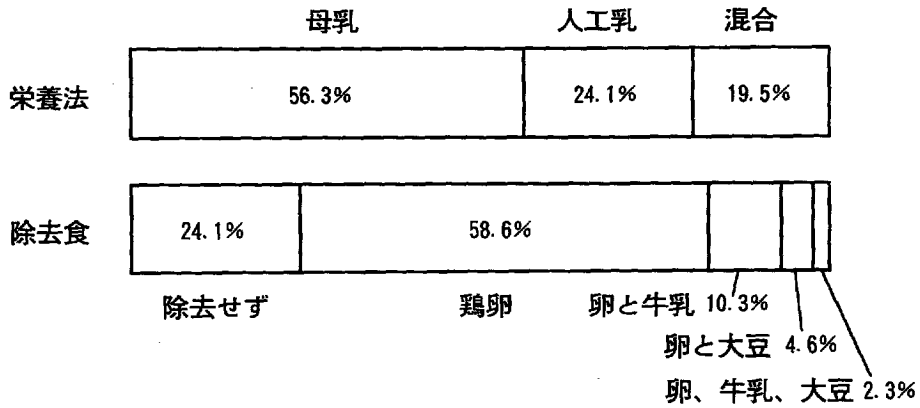


図1 アレルギー検診受診児の栄養法

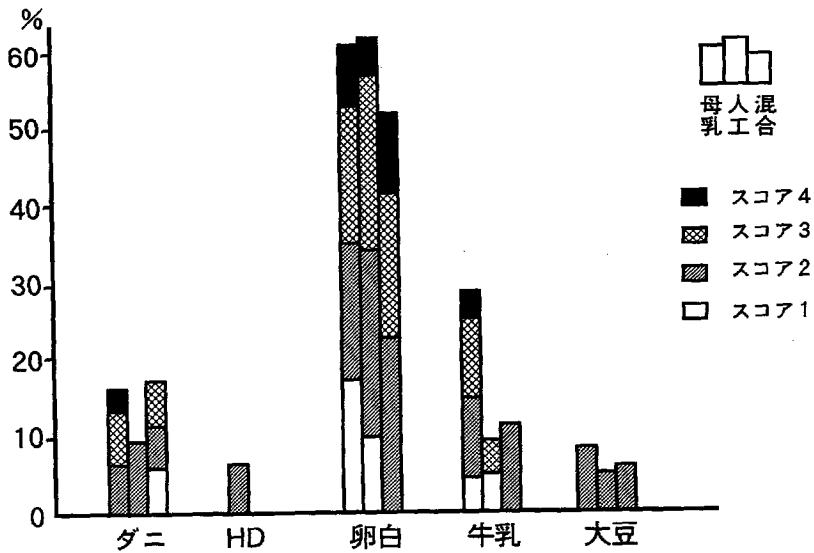


図2 アレルギー検診児のRAST陽性率

表1 その後のアレルギー性疾患の診断率

	気管支喘息	アトピー性皮膚炎
1才6か月	9/164 (5.5%)	28/164 (17.9%)
3才	4/57 (7.0%)	2/57 (3.5%)



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:アレルギー性疾患の発症予防のために、乳幼児期におけるアレルギーリスク児に対する早期発見,および早期対応の重要性が指摘されている。我々は平成元年度本研究の報告書において、東京都墨田区における3・4ヵ月乳児健康診査におけるアレルギー検診につき報告したが、今回その後の経過について検討した。問診票、IgE,RAST(ダニ,HD,卵白,牛乳,大豆)などの血液検査を実施し、その結果に基づき個々の症例につき、保健指導や栄養指導を行い、1歳6ヵ月および3歳まで経過を追った。